

続 ・ え つ せ い

—— ルキュレーション ——

河 瀬 嘉 一

おのれの立場をよく定めて、ここから人生をいささか批判したのがエッセイだと見る向きでは、エッセイを書く者、エッセイストは「諸事についてその魅力ある性質によくよく深く心を致し、これを最も明かな最も穏かな様相で見せようとする。それで、エッセイストは少くとも人をしてもう少し人生を愛し、人生の無限の変化に備えると共に、その不意の悲喜にも備えさせ得よう。」というのがベンスン（エッセイストの技術、26、7頁）であると、わたくしは前に伝えました。

エッセイの内容範囲が、今では、甚だしく広まっていますので、ほとんどあらゆる種類の散文小品が無造作にエッセイと呼ばれることがあります。例えば、新聞雑誌に寄せられたものを取りまとめて世に問うたもの、これにエッセイという銘を打ちます。その内容には歴史、政治、科学、文学、芸術はたまたま批評ありで、これが「一連のエッセイに分解、圧縮され、前後の脈絡なしに一気に読める」（パークンヘッド、イギリス・エッセイ百粹、11頁）のであります。ロキットに従いますと、エッセイとは「散らばつてゐる冥想で、言い換えれば、人の考えを表わすための乗物であり、客がバスなり汽車の箱なりに、てんでばらばらに乗りこむように、この考えが出て来て乗りこむ」（エッセイの技術、9頁）のですと。これもエッセイに対する一つの見方であります。また、「まことのエッセイとは詰らない文飾に親しみのない心で、考え考えゆつくりと創りだしたもので、回想の気分に耽りながら作つた芸術作品であり、人がこういつた遊びに楽しみを求めるのは、他の人が庭を愛し炉辺を愛し鳥を愛して楽しむのと同じである。」（パークンヘッド、11頁）ともいわれます。エッセイストの書いたものがエッセイだと、誰かが混ぜかえせば、誰だつて言葉の返えしようがありますまい。しかし、エッセイストとなれば、これに入るものは、上はベーコン、

カウリからアジスン、スチール、ジョンスン、ハズリット、ラムと、今に連らなるのであります。これらの人々は「共通の性質を有っている。そして知性が際立つており、散漫なところもある。」(スクェイア、エッセイのエッセイ)。ウィリアムズは大方のエッセイの性質について、こう言っています。「知識を用いるかも知れないが、その表わすところのものは趣味であり、明識であり、何よりも貴重な性質、創意である。」(エッセイ、11頁)「エッセイは個人の雰囲気をもたねばならない。」(同)「いかなる主題もエッセイ向きとはいえず、いかなる主題も向きでないといえない。」(9、11頁)そして「物の明かしを立てるべきではないが、明かにするかも知れない」(11頁)のがエッセイで、「即興作品であり、一気に書きながされた外見を有ち、たやすく記憶に留まつてる程の引用、例証を含むべきである。」(23、24頁)と。こうなりますと、バークンヘッドと同じ見解と見なくてはならなくなり、エッセイを試作、試論と見なせないのであります。ウィリアムズを裏書きするように、「エッセイは誰かが、みずから物するもので、エッセイの眼目は主題でなくて、つまりいずれの主題でも足りるので、個人の魅力である。」(11頁)と、ベンスンは言うのであります。「筆者がおのれ自らの印象を作り、この印象がおのれ自らの心情で形態をとるのが肝要で、エッセイの魅力は、印象を受け、これを記した心情の魅力いかんである。」(ベンスン、12頁)と、続けるのであります。ここまで、諸家の言を漫然と挙げてきましたので、これからは、少し例をラムにとります。

チャールズ・ラム 終世の「仕事はレッドホール・ストリートの棚の上に積まれており、百冊ばかりの二つ折り版の元帳を満たしている。」(略歴)と戯れに記していますが、みずからエッセイストであることは認めているのであります。「病みあがり」の中で「見すばらしくやせ衰えた姿のエッセイスト」と書いているのであります。ラムの書いたものは「ぎごちないことは確かで、何かこう書きそこねて形の整なわない拙いもので、古風な筆方用語といった見栄を張った美装で浅ましく飾りたててある」(エッセイ後集、序)ので、「食後の雑談」(集、献呈の辞)と解し、「早まつたために、どうしても完うしえなかつた初考」は許して貰いたいと言っているのであります。生きている中から、没年月日を空所にした略歴を書いたり、「とうとう自然に最後の年貢を納めた」(後集、序)

と言つたり、または、「エリヤという幻の雲にかくれる」(除夜)ラムは、とかく皮膜の間をいくので、どこまでが真意か、捕捉されないのであります。

ラムの閱歴はエッセイの中に物語られています。人名と年月を少しつけ加えますとそれだけで自伝が完成するのであります。(エインジァ、チャールズ・ラム、111頁)これ程に私人の雰囲気のみなぎつたエッセイは他にありそうにありません。みずからは「名も無い一介の自己中心主義者」(大酒家の告白)であると称していて、その物語るところは人間物語なのであります。「秘しくしたおのが心の中を時に罪なく洩し、おのが身上を慎ましやかに現わす劇曲家」さては、「他の感傷を己れに含ませまつわらせ——己れを多勢とし、多勢を己れひとりとする小説家」(後集、序)は第三母音を中心とする者だとするのがラムであります。新しいものを見ず嫌いするのがラムでありまして、「男らしくない程に、昔をかえり見るのが弱点」で、「他から同情を買われない程に回想に耽るのは、何か病変の兆候かも知れ」ず、「妻なし子なしで、わが身を人の身になつて考えるまでになつていず、共に遊べる笑の子がいないので、記憶にたち歸つて、おのがむかしの思考を可愛い後継として引きとる」(除夜)のでありました。パークンヘッドの回顧趣味はここに見られるのであります。ラムは「遠い昔のほこりとくもの巢の中をかき廻し虫くい本を読みあさつた」(ハズリット、時代精神、334頁)のであります。愛読の古本から「些々たる事柄を高雅に奇抜に扱う手法」(マカッシイ、百年後のエリア、200頁)を学びとつたのであります。ラムの行文は古雅であつて引用例証を縦横に駆使しています。引用の多いのは先人の語句を借りて、おのが表現に代えるものでありますが、この語句がまた引用と行文とのために説明される結果になるのであります。

ここで、本文とは余り関わりがありませんが、ちよつと述べます。ラムは、こと、自己の身上、告白になりますと、とくに、真偽とり混ぜて読者を迷わすのであります。そのエッセイの中で、「南海商社」の社員列伝を挙げるにしても、ラムが兄から聞かされたことを基にして、あたかも自分が記憶から書いたような書きぶりで、終りに、これら人々の名前さえ恐らく「ヘンリィ・ピムパネルとかギリシャのジョン・ナップ老のように」空想から出たので実体はなかろうと、人を担ついでいなしてゐるのであります。「35年前のクライスト学院」の「ウ

イルトシャの楽しいカン」が、そうであり（後集、序）、「ブリジット」、「アリス・ウーン」が、そうであります。「煙筒掃除小僧の讃」の中の小僧にしても齒をむき出してパイ売りを嘲り笑つてるとありますが、トラスラの「ホガース図訓」のいうことが真とすれば、これも怪しいものであります。（同書、230頁）人物、その動作、場所をぼかすラムでありますから、年月をぼかすのも、「現在を避け、未来を嘲り、愛着は過去に帰つて落ちつく」（ハズリット、346頁）ラムにとつては当然でありましょう。ともあれ、前に触れましたように、行文は古雅で洗練されています。エッセイスト、ドクター・ジョンソンが、エッセイとは「散漫に心情の流露したもの、不規則不消化な作品で、規則立っていない、秩序正しくない」と定義してるのとは、およそ程遠いのであります。

ラムは自嘲しながら他人を嘲笑するのであります。ユーモアのcockney型であります。（ロキット、13頁）。人生哲学を樹てて、これを説こうというのではありません。自他ともに同じ常民の身であるとし、おのが身に起きることは誰の身にもふりかかると考えて、一般の人間を書いて、自他ともに楽しもうとするのであります。それで、自らのバックめいた茶気ぶりをも調味してあるわけです。

ウィリアムズはラムを天才といっています。（エッセイズ、39頁）「全く天才つてことはございません。ただ、もう、ごく巧者なので。」と、ルーカスは製本屋の親爺にいわしています。（何でも少こし、45頁）

これまでをまとめますと、エッセイとは散文形式をとっており、ある事柄について即興に任せて心のゆくままに漫然と書かれたようでありながら、一本筋道が通っており、簡潔であり、圧縮されており、多少洗練されており、個性が浸透しており、理知に訴えるよりはむしろ心情に訴え、筆者と読者との心が互いに交よう短篇、ということにはなりますまいか。しかし、いまでは、自己描写と倫理といった、モンテニューがエッセイに与えた特質は失なわれて、エッセイは、ほとんどあらゆる識者の思考、思想の発表の具となり、しかも定期刊行物、新聞、雑誌と密接なつながりを有つことはいうまでもありません。

（例として挙げましたラムが芸術、芸能に対して、すぐれた眼識をもつていましたことには触れませんでしたのは、エッセイ一般についてが、この小文であるので止むを得ません。）

A. C. Benson: The Art of the Essayist
J. C. Squire: An Essay on Essays
C. H. Lockitt: The Art of the Essayist
D. Mac Carthy: Elia after a Hundred Years
E. V. Lucas: My Cousin, the Book-Binder
W. Hazlitt: The Spirit of the Age E. L. *pp.*344—
O. Williams: Essay (The Art and Craft of Letters)
A. Ainger: Charles Lamb (English men of Letters)
Trusler's Hogarth Moralized (J. Goodwin) *pp.*228—
C. Lamb: The Essays of Elia (in 2 vols., ed. by N. L. Hallward, and S. C. Hill)
etc.